



# 忠臣蔵の真実

「忠臣蔵」は赤穂事件をもとに江戸時代に作られた創作物語です。主君のための仇討物語は人形浄瑠璃や歌舞伎といった文芸の世界で人気を博し、現在でもテレビドラマや映画で繰り返し放映されています。しかし、史実と物語は別物。今回は皆さんの知っている「忠臣蔵」とは異なる「歴史の真実」をのぞいてみましょう。

## 忠臣蔵とは？

元禄14年(1701)3月14日、江戸城で浅野内匠頭長矩(あさのたくみのかみながのり)が吉良上野介義央(きらこうずけのすけよしひさ)に刀で切りかかる事件が発生。長矩はこの事件により切腹、浅野家は城を失ったものの、義央に対するとがめはありませんでした。これを不満とする47人の赤穂浪士は翌年12月14日、吉良義央の屋敷に攻め入ります。この「赤穂事件」をもとに江戸時代につくられた創作物語が「忠臣蔵」です。

上杉家と吉良家の  
かわりとは？

そもそもなぜ、米沢で「忠臣蔵」なのでしょう。その答えは吉良家と上杉家の「三重の縁」にあります。

一つ目の縁は3代目米沢藩主・綱勝の妹・三姫(富子)が吉良義央に嫁いだこと。第二の縁は綱勝が跡継ぎを残さず亡くなり、上杉家に取り潰しの危機にあったとき、綱勝の甥・吉良三之助(綱憲)を養子として迎えたこと。その後、義央と富子間に生まれた男児が幼くして亡くなったとき、綱憲の子(義周)を吉良家の跡継ぎに迎えています。

「忠臣蔵」は  
史実ではない

「忠臣蔵」は今でも人気が高い物語ですが、それゆえ、もともとなつた「赤穂事件」が物語と混同されてしまいます。例えば、敵役に描かれる吉良義央は、実際は名君であつたと伝えられています。

赤穂事件の真相とはどのようなものだったのでしょうか。今回は様々な視点から、「歴史の真実」を明らかにしていきます。

# 赤穂事件の真相に迫る

## 全国初の「吉良サミット」を米沢で開催



▲「吉良義央木像」(愛知県指定文化財) 華蔵寺(西尾市吉良町)所蔵  
「忠臣蔵」では敵役の義央ですが、実際は名君であったと伝えられています。

12月6日(土)、伝国の杜で「吉良サミット」が開催されました。来場者は約500人、ホールは「忠臣蔵」の真相を求める人で埋め尽くされました。

### 討ち入りは「義」と言えるのか

サミットの第一部では、西尾市岩瀬文庫学芸員・林知左子氏から基調講演をいただきました。「忠臣蔵」が長く人々に受け入れられて来た背景として「赤穂浪士の忠義が、江戸時代の人々の武士道精神や勧善懲悪の道義になつたから」という論説は多く目にします。林氏はこの論説に疑問を投げかけます。「確かに物語自体は道義にかなうものである。しかし、赤穂事件そのものはどうであったのか。」

講演の中では、いくつかの歴史的な資料を用いながら当時の人々が赤穂事件をどのようにとらえていたのか解説をしていきました。

例えば、事件の翌日に書かれたとされる「近江商人の手紙」では「善悪しかと存ぜず候」とあるように、当時の人の戸惑いを読み取ることができません。また、赤穂事件について学者の論説をまとめた「赤穂義人纂書」<sup>あこうぎじんさんしよ</sup>の中では「長矩が一時の怒りに任せ、自分の守るべき立場を忘れ、義央を殺そうとしたことは不義。浪士47人はこの主君の誤った志を継いで遂行しようとしたのだから義とは言えない」といった記述もあります。これらを見ると、江戸時代の人にとって、赤穂事件は手放しで賞賛されていたことではない

ということが分かります。

### 感情ではなく、資料に基づいた再検討を

討ち入りは「義」であったのか、明治時代までは検討しようとする動きがありました。だが、やがて赤穂事件は誤った「武士道」として浸透していきます。林氏は「主君の誤った行動に対する盲目的な忠義は、道理に反すること。これを正しいとすれば、自己保身に過ぎる。武士として最も忌むべき行動にあたる」と言います。そして、「赤穂事件をよく検討せず、美化したことは、悪しき事例を後世に残した。今こそ感情ではなく、資料に基づいた再検討をしていくことが重要」としました。



西尾市岩瀬文庫  
学芸員 林知左子氏

## 第二部 パネルディスカッションの様子

(左から)

愛知県西尾市 榑原 康正 市長  
 長野県諏訪市 山田 勝文 市長  
 岩手県一関市 勝部 修 市長  
 米沢市 安部 三十郎 市長



### 300年前の悲劇を思い、真実の追求を

上杉博物館 学芸員  
 角屋 由美子 氏  
 (パネルディスカッション  
 コーディネーター)

元禄14年3月14日、江戸城で起きた刃傷事件は、義央や米沢藩、そして上杉家にとって大変な災難で悲劇でした。

物語では敵役になってしまう、ゆかりの地の現役市長が集ってのサミットは、特別な緊張がありました。しかし、各市長の軽快で巧みな話術に会場は大盛り上がりとなり、楽しいひとときのうちに赤穂事件とゆかりの地について学ぶことができました。私も役目は果たせたのではないかと安堵しています。

最近では時代劇も少なくなり、若い世代は「忠臣蔵」そのものを知りません。それは時代の変化でもありますが、フィルターがかからない状態で、赤穂事件を知ってもらう良い機会かもしれません。300年前の悲劇を思い、真実の追求に努めたいものです。



### 姉妹都市・愛知県西尾市で本市職員が講演

12月14日(日)、「吉良義央公 毎歳忌」が行われました。本市から市文化課の職員(青木昭博)が招かれ、西尾市の皆さんに講演を行いました。

## 「わがまち」から見た赤穂事件

サミットの第二部では吉良家ゆかりの自治体の市長にお集まりいただき、パネルディスカッションを行いました。

愛知県西尾市は、赤穂事件の中心人物・吉良義央の領地の大部分があった地。榑原市長は義央は「非業の死を遂げた後、芝居の『忠臣蔵』の影響で、『極悪人』という世評を受けることになってしまった」と言います。西尾市には、義央が領地を水害から守るために私財を投じて約180メートルにも及ぶ堤防を一夜で築いたという逸話や、農

耕馬に乗って領内を見廻り、気軽に領民に声をかけていたという「赤馬伝説」が伝えられ、今でも名君として慕われています。長野県諏訪市は、赤穂浪士の討ち入りを受けた後、義央の跡継ぎであった義周が流された地。流刑後3年で亡くなった義周は市内の法華寺に葬られました。以後、法華寺では丁重に供養を続け、現在、義周のお墓は諏訪市史跡に指定されています。岩手県一関市の赤穂事件との関わりは松之廊下の事件後、浅野長矩が切腹した場所が一関藩主・田村家の江戸藩邸であったこと。そのようなことから、「忠臣蔵」の影響で田村家も「悪役」

と認識されてしまうことが多いようです。勝部市長は「物語は物語として、史実はしっかりと捉えて、それを皆で共有していきたい」と語りました。米沢市と吉良家の関係は、密接な「三重の縁」によるもの。安部市長は「市民の多くは『忠臣蔵』を本当のことだと思いついて、責任を感じてしまっているのではないかと」とし、「予告もなく襲ってきた47人に奮戦した義周。当時義周は16・17歳、太平の世に大名の子で、このような振る舞いができるのはさすが上杉謙信・景勝の血筋。こういったことを市民、全国にもっと発信していきたい」と語りました。